

AFICS-J



Mission Statement

国連システム元国際公務員日本協会
(AFICS-JAPAN) は、

- 国連システムの活動に協力します
- 会員のために必要な情報収集を行い、最新情報を提供します
- 会員相互の意見交換や情報交換のための交流会合を開催します
- 国際機関で働く人材育成を支援します

« 記事一覧 »

- 第 6 回総会開催
- 現場からの報告・吉川元偉前国連大使
- 明石康特別顧問の挨拶概要
- 国際的人材育成支援 AFICS-J の新しい取組 伊勢会長
- スーパー・グローバル・ハイスクールと ICU 高校の取組
- 国連職員増強に関する外務省との会見
- 会員短信：新入会員 3 名
- お知らせ：
海外資産管理と税制説明会
第 7 回年次総会の案内
会費納入のお願い

AFICS-JAPAN

Newsletter

No. 8 -2017 2017 年 7 月 31 日発行

第 6 回 AFICS-J 総会開催

新しい活動の取組みを探る

第 6 回年次総会は、3 月 29 日国際文化会館において開催され、第 1 部総会議事、第 2 部総会プログラム「現場からの報告」講演ならびに挨拶、第 3 部懇親会が行われた。山本和副会長が第 1 部の総会議長、並びに第 2 部、第 3 部の進行を務めた。

第 1 部総会議事では、会員 29 名の出席と 14 名の委任状参加があり、山本議長進行のもと以下の 3 議案の審議を行った。まず、第 1 号議案 2016 年活動報告では、伊勢桃代会長から活動報告がなされた。次に、第 2 号議案 2016 年収支決算報告及び監査報告は、澤田良枝会計から 2016 年収支決算報告、久山純弘監査役から収支計算書および関連書類がすべて適正であるとの監査報告書が提出

された。最後に、第 3 号議案 2017-2018 年事業計画案及び予算案は、伊勢桃代会長から事業計画案の説明、佐藤純子書記から予算案の説明がなされた。審議の結果、いずれの 3 議案も原案通り承認された。

2016年の主な活動としては、AFICS-Jのプロアクティブな運営を進める執行委員会の開催、年2回のニュースレター発行に加え、会員のための「国連年金セミナー」と「海外財産調査制度に関するセミナー」を実施し、さらに社会貢献のための「人材育成支援勉強会」を引き続き行っている。

2017-18年の事業計画では、創立7年を迎えるAFICS-Jが創設期から発展期に移行することに鑑み、伊勢会長は新たな取組の導入を強調した。（伊勢会長の「国際的な人材育成支援におけるAFICS-Jの新しい取組」は、後掲記事を参照）特に人材育成支援に関しては、支援対象を小・中・高校に引き下げ、おもにスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）に対する効果的な支援の枠組みを確立していくことから取り組むこととした。（* SGHの詳細については、後掲記事「スーパー・グローバル・ハイスクールとICU高校の取組」を参照）

会員の身近な関心事である国連年金に関しては、永吉紀子氏を新たに年金担当執行委員に迎え、よりきめ細やかな会員対応を目指している。

またAFICS-Jを代表してFAFICSの会合に出席している佐藤純子書記が、引き続きVice Presidentに選任されたことで今後とも中枢部との緊密な関係と有用な情報が期待される。

総会議事に続いて、第2部総会プログラム「現場からの報告」講演ならびに挨拶では、はじめに吉川元偉 前国連日本政府代表部特命全権大使の「イーストリバーに吹く二つの風」の講演、続いて明石康特別顧問が挨拶に立ち、国連と国際情勢について論評された。（吉川大使の講演要約と明石特別顧問の挨拶は、後掲記事を参照）

また、総会プログラムの締めくくりにあたって、本会の会員であり、NPO2050を創設して長い間ご夫妻で活動に携わってきた北谷勝秀氏がこの活動から引退されたことに対し、伊勢桃代会長が感謝と慰労の言葉を述べた。北谷氏は、引退後は若い人たちに国際感覚や国連カルチャーを知ってもらうためのアドボカシー活動や情報発信をしていきたい、AFICS-Japanの活動にも協力したいと述べた。北谷氏にはいずれ機会を作って、NPO2050設立の経緯、活動の苦労話、日本のNPO活動の課題などうかがう予定である。

第3部懇親会は、参加者の集合写真を撮影したのち、緒方貞子特別顧問の乾杯の音頭で始まり、外務省国連企画調整課臼井将人課長が挨拶に立ちAFICS-Jとの協調関係について述べた。例年のように、懐かしい友人との再会や関係者の交流など和やかな歓談の時を過ごした。（出所：第6回AFICS-J総会報告書）



総会プログラム『現場からの報告』

《イーストリバーに吹く二つの風》

吉川元偉・前国連日本政府代表部特命全権大使

総会の議事終了に続いて、今回は「現場からの報告」の講演者として、2016年6月に国連日本政府代表部特命全権大使を退任された吉川元偉大使をお願いした。国連政治の最前線でご活躍された大使が、新事務総長の選考経緯を含む国連の最新動向と国連政治に関する大使の思いをつぶさに伝える、大変興味深い講演だった。以下に、吉川大使の講演概要を掲載。（記録：秋月弘子執行委員）

今日の演題は、「イーストリバーに吹く二つの風」です。イーストリバーとはもちろん国連で、国連に吹く二つの風についてお話をしたいと思います。

一番目の風は、「希望の風」です。それは、昨年末にアントニオ・グテーレスが国連事務総長に選ばれたことから吹いている風です。この風は、国連がこれまでの 10 年間の停滞を打ち破って、具体的に成果を出せるのではないかと希望の風です。

二番目の風は、不安（uncertainty）に対する懸念（concern）です。これは、もちろん、ワシントンから吹いているドナルド・トランプという風です。

一番目のグテーレスの風についてですが、今回グテーレスが選ばれた最大の功労者は、総会議長を務めたデンマークのルケットフトだと私は思っています。その理由は、ルケットフトは相当な反対を押し切って、候補者全員との完全に公開された 2 時間にわたる Q&A 会合を設けたからです。



ちょうど 1 年前の 1 月から 3 月頃には、各国の中ではいろいろな動きがありました。大きな流れは 2 つありました。1 つは、東欧諸国を中心として、地域グループの中で事務総長を出していないのは東欧だけなので、次は東欧の順番だ、という流れです。2 つ目は、まだ一度も女性の事務総長は出ていないので、次は女性を事務総長にするべきだという流れです。この「東欧」と、「女性」という 2 つのことにどのような立場を取るかということについて、みな踏み絵を踏まされました。私は、最良の候補者を選ぶことが大事であって、地域ローテーションに固執すると良い候補が出てこない場合にはどうするのか、また、女性は好ましいが、女性でないといけなくなると、立派な男性候補が出てきたときに困るではないか、と発言しました。

東欧について言えば、ロシアがクウィーン・メーカーになりたいと思っており、東欧の中の EU 非加盟国で誰か出せるだろうか、東欧の EU 加盟国であればロシアに忠誠を誓うような候補者がいるであろうか、というような動きがあったと思います。実際に蓋を開けてみると、東欧からはかなり候補者が出ました。とくに、旧ユーゴスラビアの国々は、ほぼ全部の国が候補者を出してきました。最初から有力候補と言われていたのがアントニオ・グテーレスですが、そのほかにも、ヘレン・クラーク、スサナ・マルコーラ、イリナ・ボコヴァ、などの人々が出ました。

吉川元偉氏プロフィール

1974年国際基督教大学教養学部
卒業、同年外務省に入省、スペイン
語研修

国連日本政府代表部政治担当大
使、外務省経済協力局審議官、中
東アフリカ局長を経て、

2006年駐スペイン大使

2009年アフガニスタン・パキスタン
支援担当大使

2010年経済協力開発機構
(OECD)日本政府代表部大使・
執行委員会議長

2013年6月-2016年6月国連
日本政府代表部特命全権大使・安
全保障理事会代表

2017年4月より国際基督教大学
特別招聘教授

私は、今回の事務総長選に大きな影響を与えたのは、各人が2時間、全員の質問に答え、それがテレビ放映され、終わった後にそのまま記者会見を行うという、これまでにないやり方が採用されたことだと思います。私もすべての会合に出席して、全員に質問しました。私の評価は、「頭一つ抜け出したのは、アントニオ・グテーレスである。」というものでした。彼のハンディキャップは2つあり、西欧という地域と、女性ではないということでした。女性ではないというについては、グテーレスは、自分がUNHCRの10年間でやってきたことを見てほしい、誰よりも女性を登用してきたし、自分が事務総長になったらナンバー2には女性を置くと明言しました。

その後、安保理における議論でも、この影響が残り、結局、抜け落ちて行った候補者は、誰が見ても事務総長の器ではない人、逃げの答弁が多かった人でした。グテーレスは、英語のほかに3か国語くらい話せます。言葉の能力、いろいろな地域の紛争の実態を知っていること、現下の最大の問題である難民問題に10年間携わってきたこと、などがグテーレス選出に繋がったと思います。このように、私は、今回の事務総長選の最大の功労者は、ルッケトフト総会議長だと思います。

今回の事務総長選の結果、いくつかのことが次の事務総長選について言えると思います。1つは、全員の前でQ&A会合を開き、自分の意見について述べるというやり方はもう後戻りはしないでしょう。次の事務総長選では、さらなる透明性が求められ、課題に対する考えを皆の前で話す能力が問われるでしょう。また、地域グループの問題は残るでしょうが、次は東

欧ということはなく、ラテン・アメリカに非常に有利な状況が出来たと思います。

トランプ政権の誕生を契機として、これまであった問題がいっそう複雑化しているので、新事務総長の舵取りは難しくなっています。

第二の「不安の風」は、「批判の風 (wind of criticism)」でもあるわけで、次にこの部分について考えてみます。

まず、トランプの国連観についてですが、何もないのかもしれませんが、彼を取り巻く人たちと、伝統的な共和党保守系の国連観というものはあります。“America First”という考え方もそうですし、歴史を紐解けば、ウッドロー・ウィルソンが提案した国際連盟は米国議会で批准されませんでした。当時は、政権は民主党、議会は共和党でした。今はどちらも共和党です。共和党の最近の政策を見ると、気に入らなくなるとお金を止めるという政策です。最近も同様な政策の萌芽が見られます。大きな流れとしては、アメリカの軍事支出、国防費を増やそう、そのために PKO の分担金、対外援助、人道支援などの経費を、義務的なものも含めて、減らそう、という政策の兆候がすでに見えています。

また、トランプ政権になってから非常に憂慮する現象がいくつか見えてきています。私が一番憂慮しているのは、中東和平の完全なる停滞です。トランプ政権は、これまでの共和党以上に親イスラエルの色彩が濃くなっています。同時に、シリアについては、オバマ政権以上に何もしない、すなわち、ロシアに主導権を与えるという方向が明らかになっています。シリアについても大変憂慮されます。

中東世界で起こっている、シーアとスンニの対立、イランとサウジの対立に、アメリカが仲介者としてではなく、イスラエルおよびサウジアラビアの盟友としての立場を明確にしてしまっているので、これが中東和平に良い影響を与えるとは考えられない。これがもう一つの憂慮する点です。

次に、日本の取るべき政策についてお話しします。

アメリカが手を抜くであろう人道、開発分野では、MDG s ができた 2000 年と SDG s ができた 2015 年の間に、日本の ODA は 30%減りました。この間他国の ODA は、アメリカは 3 倍、イギリスは 4 倍近く、ドイツも 3 倍に増えました。中国は、すでに開発分野の大きなプレーヤーです。日本はこれまで以上にこの分野で活動をするべきでしょう。

2 番目は、PKO です。アメリカは、もともと人は出していませんが、資金面の貢献を減らそうとするでしょう。日本は、なかなか人員派遣ができないので、アフリカの PKO 要員の養成をするということで、ナイロビで自衛隊が工兵、施設部隊の訓練をしています。PKO で何ができるかということは大変難しい問題です。

けれども、アメリカが手を引くから日本も同じように手を引くのではなく、できればアメリカとは違うことを、アメリカがやらないことをマルチの分野ではぜひやっていただきたいと思います（文中敬称略）。

総会プログラム：明石康特別顧問の挨拶概要

AFICS-Japan がいろいろな困難にもかかわらず今日まで活動を続けることができたのは、伊勢桃代会長のリーダーシップのたまものです。今後も活動を助けることが大切です。

トランプ政権の国連に対する政策がどうなるか心配しています。しかし民主党政権が国連にとって遥かに良かったかという留保の必要があるでしょう。カンボジア PKO、旧ユーゴスラビア PKO の現地責任者としての経験からいうと、共和党とその前のクリントン政権（民主党）を比べてそんなに変わらないような気がします。

1994 年、国連はソマリアに強力な PKO を展開、アメリカ海兵隊員犠牲者 18 人を含む多くの犠牲者を出した。ブトロス・ガリ事務総長は 1992 年の「平和の課題」の中で、「平和強制」について熱く語り、ソマリアで軍事行動を展開した。しかしその結果多くの犠牲者を出し、1995 年には国連 PKO の失敗を潔く認め、ソマリアから撤収することにした。

国連は現在、世界中に PKO 活動を展開し、そのうちアフリカの 3 – 4 の PKO がいわゆるロバスト（強力な）PKO です。南スーダン PKO もその一つで、日本は 5 月半ばまでにここから撤収する（注：3 月 29 日現在）。やむを得ないことだが残念です。日本の「一国平和主義」はもはや世界では通用しません。一部でもよいから強力な PKO にも参加するような強靱な国内体制を作る必要があります。

アメリカの民主党に関して言えば、クリントン政権下、ソマリア PKO で海兵隊員が犠牲になったとき、大統領令 25 で、PKO 参加に関しアメリカ人が指揮する PKO にしか参加しないなど条件を付けたことは、超大国として見苦しいことではなかったかと思います。

今年は日本が初めて PKO に参加（カンボジア PKO）してから 25 周年となります。長期的見地から、日本の国際的役割と責務の一端として PKO を論ずるべきだと思います。PKO 参加の人命への危険の面だけを語るのは日本国民やメディアの内向な姿勢を示すことになりはしないか危惧されます。日本だけでなくドイツと中国にとってもカンボジア PKO は初めての国連 PKO 参加だったので、この 3 カ国が 25 周年の今年、一緒に話し合う良い機会だと思います。日本にとってはアメリカとの関係だけでなく、隣国である中国や韓国との関係をもう少し改善する必要があると思います。（記録：佐藤純子書記、編集文責：登丸求己）

国際的な人材育成支援における AFICS-J の新しい取組

会長 伊勢桃代

日本社会での国連への関心度は他の先進国に比較し低いレベルにあります。また若い人達の国連でのキャリア志望が減少していると報告されています。ご存知のように、日本人職員数は長年「望ましい範囲」よりもずっと低い数値となっています。こういった現状は、国連での日本人職員の活動にも影響し、将来の日本の国連での地位にも影響を与えかねません。

AFICS-J のメンバーは、国連機関を引退された方々、その後大学教職等へ転職された方々であり、豊かな国際的能力と経験の持ち主です。こういった知識・能力をどうやって若い世代に伝え、国際人としての成長に役立たせることが出来るかを模索してきました。このために人材育成勉強会を重ね、今後 AFICS-J が貢献し得る活動についての提案をまとめました。この提案は執行委員会の審議を経て、第 6 回 AFICS-J 総会で承認されました。執行委員会は現在いろいろな可能性を考えながら、具体的な活動準備に取りかかっています。以下にこの取り組みの進捗をお知らせします。同時に、活動についてはメンバーの方々からも広くご意見を伺い、取り入れていきたいと思っております。

まず、必要とされる国際的能力の育成には、中学・高校という早い段階からの取組みが必要と考え、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）で頑張っておられる先生方と生徒たちを対象に支援を行うことを考えています。この為に私たちが出来ることは、基本的にメンバーの皆様が直に学校を訪問し、お話しすることだと考えています。お話しの内容は、国連の成り立ちと平和の役割を共通理解として、いろいろな現場からの経験と知識をお伝え頂きたいと思っています。是非ご協力をお願いいたします。

次に私たちが出来ることは、SGH と国際機関との連携の増進や必要な国際情報へのアクセシビリティの強化への支援だと考えています。SGH の一つ一つの学校では国際的教育の取組みに全力を尽しているものの、国際機関などとの連携は薄く、国際機関の知識や情報は限られているようです。

中・長期的には、中学・高校を対象とした AFICS-J による人材育成支援活動が、将来国連や他の国際機関を目指す若い人材の増強と国際的感覚の醸成に役立つようなユニークなプログラムの提案をしてみたいと考えています。

これから、講演者が SGH でより効果的な話しができるような、内容の枠組み作り、パワーポイントなどを含む資料の準備なども進めていくつもりです。

AFICS-J は、文科省、外務省ならびに国連機関からのご協力とご指導も戴きながら、国際的に活躍できる人材育成支援プログラムの確立を目指し、AFICS-J の基本的プログラムになるよう取り組んでまいります。

人材育成支援勉強会：

スーパー・グローバル・ハイスクールと ICU 高校の取組

スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）と国際基督教大学（ICU）高等学校の取組みについての勉強会は、6月19日10時から国際文化会館セミナー室で行われた。いち早く文科省の SGH 指定校になって国際的人材の育成に取り組んでいる ICU 高校の原かおり教頭に講演をお願いし、AFICS-J からは 10 人が参加して SGH 支援の取組みについて考えた。（記録：宮地節子書記）

はじめに伊勢会長から、多くのメンバーが人材育成の支援活動に関心を示していることをもとに、AFICS-J が人材育成支援の勉強会を続けてきた経緯の説明があった。更に今後は AFICS-J の看板になるような持続的な人材育成支援のプログラムを確立したいと述べた。

これまで国際的人材育成の対象は当然のように大学生と考えられてきたが、一般的な国際性の資質ができるのはもっと子供の世代であり、AFICS-J としては子供たちの国際性に着目して人材育成の支援を進めて行く方針とした。その結果、当面は AFICS-J のメンバーが学校（特に中学、高校）に出かけて行き、先生方や生徒たちに国連のことを話すことから始め、現在文科省が推進している SGH 指定校を手始めに、まずは東京地域を中心に取り組むことにした。

文科省の資料によれば、SGH の目的は「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力などの国際的教養を身につけ、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高校生のうちから育成する。」というものであり、そのための事業として、大学などと連携してグローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成に取り組む高等学校などを「スーパー・グローバル・



ハイスクール」に指定し、質の高いカリキュラムを開発・実践するものである。SGH は、2014 年に最初の 56 校、2015 年に 56 校、2016 年に 11 校が新たに指定されている。指定期間は 5 年間である。

ICU 高校は 2013 年に SGH 申請を行い、2014 年の SGH 指定校となった。ICU 高校では、生徒の 2/3 が帰国生であることから、生徒のバックグラウンドが多様である。帰国生の中でも出身地域もいろいろ、英語の能力もばらばらである。最近是中国からの帰国生が増えているのが特徴である。ICU 高校の取組みとしては、どこに焦点を当てる

かを決めることに悩んでいるが、逆にその特色を生かして、帰国生と国内生の学びあいを中心に行っている。2016 年の例では、SGH の研究課題として「アジアにおける多文化共生」をテーマとした体験学習をいろいろ考えている。SGH の補助金の使い道は、生徒のスタディツアー費用の一部を補助、教員の引率費の一部補助などである。

元々国際的なことに関心がある生徒が多いので、海外へのスタディツアーに参加するだけでなく、国内へのスタディツアーや校内でも学ぶことができるプログラムを考えている。学校社会はどうしても対外的なネットワークが乏しいところであるので、学校内だけで学ぶのではなく、外部の大学、国際機関、卒業生、企業などと積極的なネットワークを作り、問題意識を活性化しながら勉強できるような環境を作っていくという機会であると捉えている。将来的に国際機関で活躍できるような人を育てることを目的としている。この指定期間にどれだけプログラムを発信できるようになるか、その後もいかに継続させていくかが課題である。また、SGH で試みたことを新しいカリキュラムに展開できるかが課題である。

講演後の討論で指摘されたことで、AFICS-J が貢献できることは原則的に国連の経験を伝えることであるが、ある大学での例を挙げて、ただ経験談を聞くだけでなく、課題を決めて、その講演を聞いた後にグループ・ディスカッションをして、更に学ぶことが大事である。また、国連本部における例として、いろいろな分野のパネリストを集めてパネル形式で行うこともあった。高校生を対象にする場合は、ただ話だけではなく、ビジュアルなものを使って飽きさせない工夫も必要になる。また、生徒たちの国際性を身につける手伝いをするために、様々な国連機関で働いた経験を持っている AFICS-J のメンバーを大いに活用して欲しいと提案があった。

最後に、AFICS-J が国際的人材育成の支援対象を中学・高校に広げ、SGH の指定校を手始めに支援活動をするという方向性を定めたことにより、あらためて国際的人材とは何か、SGH は高校生の人材開発として何を求めているのか、AFICS-J は高校生に何をどう伝えればいいのか、一様ではない AFICS-J の個々のメンバーは具体的にど

ういった経験を伝えるのか、などこれからの取組みの課題が見えてきたようだ。特に、伊勢会長も強調しているように、国際的人材育成の支援活動を AFICS-J の看板プログラムとするためには、個々の会員の経験を効果的に伝えるプレゼンの構成、資料・教材の作成など専門的支援ができないか。一方、国際的人材の資質として、異なる価値観を生む文化の多様性理解と異文化の相互理解を進めるコミュニケーション・スキルを育てていくようなカリキュラムの開発と実施について、SGH の先生方と交流していくことはできないかなど、今後の積極的な取組みが期待される。本年 9 月 2 日には第 1 回目の SGH 訪問を実施する予定である。

日本人職員増強に関して外務省と意見交換

AFICS-Japan では、国連における日本人職員の増強に関して、勉強会の結果をまとめて外務省に提案（2015 年 11 月）をしていたが、この度、外務省から同省の最近の対応について説明を聞き、意見交換を図るべく 6 月 9 日午後 3 時から同省会議室で意見交換会を行った。当方からは上記提案作成のタスクフォースメンバーの千田享氏、北谷勝秀氏、山本和副会長が参加した。先方からは、国連企画調整課長臼井将人氏、国際機関人事センター室長阿部智氏、同室課長補佐萩野敦年氏が参加された。なお、この意見交換は、AFICS-J 総会時における臼井課長と千田氏の会話をきっかけに実現に至ったものである。

先ず、阿部人事センター室長から、「AFICS-J との意見交換用資料」に基づき最近の取組みについて以下の概略説明があった。

- 1) 広島平和センターへの業務委託事業：平和構築、開発に関する諸分野（法律、行政、医療、IT、調達、広報、広報等を含む）で、国際機関での勤務経験のある人に加え、民間企業および NGO/NPO 等で活躍している実務家も対象としたミッドキャリア・コース。
- 2) 外務省国際機関人事センターによるキャリア相談のための情報登録制度の強化・充実：国際機関への就職のため、個人の経歴や専門性、志望などに応じてアドバイスや空席情報の提供を行うための制度で、国際機関ロースター登録とは別の情報提供サービス。
- 3) 国際機関人事に関するメール配信サービスの強化：国際機関人事センターでは、国際機関人事に関する新着情報および職員募集情報などを逐次メールで配信。
- 4) その他、様々な分野を対象とした社会人向けの国際キャリア研修：テーマは、キャリアガイダンス、国際機関への履歴書の書き方、応募書類の書き方講座、人事専門家として国際機関で働くには、法曹も国際機関でキャリアアップ、国際機関への就職についての「トワイライト・トーク」、国連 PKO 体験談、国連 WFP で働くには、UNDP でのキャリア形成、等々多様なテーマ。講師は人事センターの役職者、国連機関の現役職員、人材コンサルタント、JPO 派遣者など、実際に良く知る者が務める。

これらの説明に対し、AFICS-Jとしては、外務省の最近の取組みを非常に意欲的なものと高く評価するとともに、P4やP5など幹部クラスのキャリアアップ、さらに上級の人材の送り込みについての進展を期待している旨などの意見に加え、日本としては公募制度を導入して広く候補者を募ってはどうかという提案も行った。さらに、AFICS-Jという既に現役を退いた人たちが長年国際機関に勤めて得た、仕事のやりがいとか生きがい、使命感などを伝えるほか、様々な体験の中で、どう修羅場を切り抜けたかなど、元職員ならではの問題意識や価値観を伝える機会が必要なのではないか、などについて意見交換を行った。今後 AFICS-Jとしては、できることは何なりとお手伝いし協力して行きたい旨を伝えた。これに対し、外務省および人事センターとしても、元職員のノウハウを研修に活用するなど、引き続きこのような意見交換や、協力を進めて行きたいということであった。（記録：山本和副会長）

発行：国連システム元国際公務員日本
協会 (AFICS-Japan) 執行委員会
Email: afics.japan@gmail.com
Web: www.afics-japan.org

《国連人》

最近のニュースでISの支配勢力図をよく見る
が、最貧国や紛争国での駐在経験から、いつも
国の統治とは何かを考えさせられる。

紛争地の特徴は、中心拠点部は「面」で支配さ
れているものの周辺部は「点」であり、中心部と
点は道路という「線」でつながっているだけなの
が分かる。国は、どこでもすべて面で統治されて
いる訳ではなく、封建的な未成熟国の中には点と線
でしか統治されていない国が多くある。

当時、UNDPスタッフが車で僻地のプロジェクト
に行くときは、政府発行の通行証を持つていくの
だが、地方軍閥の支配地域ではそう簡単に検問
所を通過できない。そもそも、カラシニコフを抱え
た見張りは、国連のことなどは知らないし、政府
が何だという扱いだからだ。（編集子）

会員短信

新入会員：須藤浜子さん（IMF）、山崎節子さん（UNDP）、深澤良信さん（UN-Habitat）が、新たに会員となりました。2017年7月現在の会員数は80人です

お知らせ

● 海外個人資産管理についての説明会

SMBC 信託銀行（元 Citibank）横浜支店、専門家と税理士による海外個人資産の管理と関連税制、日程は10月前半で調整中

● 第7回年次総会の案内：

2018年3月28日（水）17:30 国際文化会館で開催予定

● 2018年会費納入のお願い：

年会費（5千円）の納入をお願いします。

三菱東京UFJ銀行麹町支店（店番 616）普通預金

口座番号 0118643、

口座名義：アフィックス ジャパン ヤマト カノウ

（AFICS-Japan 山本和）

☆前年度会費未納の方は、その分も合わせてお振込みください。

なお、年会費は年次総会受付でも納入できます。